
インフィニット・ストラトスinTheREDDECADE

龍斬王

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス in The RED DECAD E

【Nコード】

N1351BA

【作者名】

龍斬王

【あらすじ】

これは……一人の青年が女性にしか使えないISとそのISの元になった『仮面の戦士』の力を持ち、ほとんどが女子生徒の学園で繰り広げる……ラブコメ有りな学園バトル物語。

プロローグ（前書き）

本編の主人公の設定は………後日、
だしますので悪しからず。

プロローグ

とある試験会場で……織斑一夏おりむらいちかという男子受験者が女性にしか使えないISを起動させ、試験官の教師を倒した……そんなニユースが飛び交う中……どこかの路地裏で……

??? 「………（確か……この辺りで反応が………）」

左手首に……中心が透明な球体で周りを赤が大きく目立ち、白い異なる12のマークが透明な球体を囲んでいるブレスレットを付けている……青年がいた。

??? 「まったく……閻魔の爺さんと士に『セイ』の頼みじゃなかったら……こんなところに来ないし……それに、『セイ』の野郎……『この世界』に合わせるからって……ISにしくなくてもいいだろうに。」

青年が愚痴をもらした直後……

??? 「っ！！！」

一ドンッ！！！！

??? 「ぐっ！！？」

背後から強烈な衝撃を振り向き様に受け……受け身を取る間もなく……後方に吹き飛んだ。

??? 「がはっ！！……くっ………」

青年は衝撃を与えた者を確認しようとしたが……そこには、何者もいなかった。

??? 「く……そ………まずい……意……識が………」

青年は………そう言って、気を失った。

??? 「あれっ！？……大丈夫ですか？しっかりしてください！」
??? 「………」

青年が気を失った……その直後に眼鏡をかけた女性が……青年を見つめ駆け寄って、青年に声をかけていた。
??? 「あ………どうしよう。」

??? 「うつ……。」

??? 「あっ！」

女性がどうするか悩んでいたら……青年が目を開けた。

??? 「大丈夫？」

??? 「……うつ……。」

青年は……完璧に意識が戻ってる訳ではないのか……視界は霞んでいたが……女性の顔だけははっきりと見えていた。

??? 「……ま……や……。」

青年は……誰かの名前を呟き……再び気を失った。

??? 「あっ！ しっかりしてください！！……でも……さつき、『まや』って言った。」

すると……女性は、どこかに電話を入れて……青年を肩に担ぎ……『IS学園』と呼ばれる……学校の裏門を目指した。

プロローグ（後書き）

特に書くことはないが……第1話、IS学園……ご期待あれ。

第1話 IS学園での出会い(前書き)

オリジナル主人公の名前が出ます。そんで……ヒロインは……
……

第1話 IS学園での出会い

―― IS学園 ――

IS学園の中にある保健室……そこには、昨日の青年が眠っていた。

??? 「うつ! …………… はっ!! …………… ここは？」

青年が目覚まし……部屋を見回した。

??? 「あっ! 気がついたんだ。よかった。」

部屋に眼鏡をかけた女性が入ってきた。

??? 「君は? それに……」

??? 「私は……山田真耶。あと、ここは…… IS学園の保健室。君、昨日の朝……学園近くの路地裏で倒れてたんだよ。」

??? 「路地裏で……」

「もし、私が見つけてなかったら……あのまま、だったんだよ。」

??? 「そうか……ありがとうございます。」

「ううん。……それで、君の名前は？」

真耶と名乗った女性が青年に昨日の事を話した後……青年の名前を聞いた。

??? 「俺は……りゅうづやぎ龍崎紅牙……親しい奴は『セキ』と呼ぶ。」

「龍崎君……失礼だとは思ったけど……左手首のブレスレットを調べたの。」

紅牙は、左手首の方をちらっと見た……その後、すぐに山田真耶を見た。

「そしたらね…… ISの反応が出たんだけど…… ISってわかる?」

「女性しか使えないって……あれか?」

「うん！いつ……手に入れたの？」

「ん？……前から持ってたな。」

「そうなんだ。」

すると……………

「……？」「山田君？なにをしているんだ。」

「あっ！織斑先生！お疲れ様です。」

山田真耶がすぐに声のした方を向き……お辞儀をした。

「目が覚めたようだな。」

「おかげさまで……。」

「まあいい……明日、これに着替えて教室に来い。」

紅牙は、織斑先生と呼ばれた女性から、IS学園の制服とその資料と分厚いISの資料を渡された。

「なにこれ？」

「明日から……お前は、IS学園の生徒だ。ちょうど昨日が入学式だったから……入学式に間に合わなかった新入生で通る。」

「ふーん。」

すると……………

「でも……織斑先生！部屋はどうするんです？」

「部屋か？一夏と一緒でもいいが！！女子共に変な妄想をされては困るからなく。」

すると……………

「……？」「失礼します。織斑先生？」

「ん？なんだ、セシリア……早く寮に帰れ！」

セシリアと呼ばれたのは金髪の少女だった。

「（金髪……外国人か。）」

「訓練場の鍵を返しに……あら？」

セシリアは、織斑先生の肩越しに紅牙を見た。

「ん？なんだ。」

紅牙は、セシリアが見ている事に気付き……セシリアをじっとその両目に捕らえた。

「っ!!」

セシリアは紅牙の視線に気付いた。しかし、目をそらせなかった。

「セシリア？」

「はっ! ……おほほほ。織斑先生、訓練場の鍵……ありがとう
ございました。」

「ああ。」

「あと………」

「どうした？」

「そちらの殿方……是非とも私の部屋へ。」

と、セシリアは織斑先生に提案した。

「お前が良いなら……私はかまわん。山田君! そいつを……」
一人で歩ける。」……そうか。」

と、紅牙はベットから降りて歩こうとしたが……

「ぐっ!」

ふらついて倒れそうになった……すると

「まったく、強がらないで……他人を頼りなさい。」

「すまん。」

「制服等は……山田先生に持ってもらいますから。私の部屋に行
きますわよ。」

「頼む。」

「山田先生。」

「あっ! はいっ!!」

セシリアは紅牙を肩に担ぎ、山田先生は紅牙用の制服等を持って
……寮の自分の部屋へ連れていった。

第1話 IS学園での出会い（後書き）

今回もあまり書きません。次回、第2話…転入。

第2話 転入（前書き）

オリ主がセシリアや一夏と同じクラスに転入します。

第2話 転入

――IS学園生徒寮・セシリアの部屋――

セシリアと紅牙と山田真耶先生は、セシリアの部屋に来ていた。

「着きましたわ。ベッドでよろしくて？」

「いや、壁際でいい。」

セシリアは紅牙の言う通りに壁際に連れていった。

「悪いな……せつかくの好意を……」

「いえ……山田先生、制服等は私がお渡しします。」

「そう？お願いね。」

「わかりました。」

「じゃあ……私は、帰るけど……彼のこと……お願いね。おやすみ。」

「おやすみなさいませ。」

山田真耶先生は、セシリアと話をしたあと……部屋を後にした。

「ふう……制服を渡されたってことは……IS学園に転入するかもしれませんわね。」

「『するかも』じゃあない……『転入するんだよ』。」

セシリアの呟きにそう返す紅牙。

「本当ですか？」

「『織斑先生』っていう人が……そう言ってた。」

「織斑先生が……これは、本当ですわね。」

セシリアの疑問に即答で返す紅牙……それにより、納得するセシリア……しかし……セシリアの気持ちは、その返答よりも……紅牙の左手首のブレスレットが気になっていた。

「それはそうと……そのブレスレット……ISですか？」

「そうらしい……何故かは知らんがな。（本当の事を……早

々、話す訳にはいかないからな。」

「なるほど……既に専用機をお持ちで……それで、何処で手に入れたんですの？」

「わからん……気付いた時には、この状態で机に置いてあった。」

「つまり……ＩＳを使ったことは無いと。」

「まあ……そうなるな。」

「そうですか。では、私……これから、シャワーを浴びるので……」

「覗かねえから……早く行け。」

「それを聞いて安心しました。」

セシリアと紅牙は……いくつか会話をして……セシリアは部屋に備えてあるシャワールームに入った。

セシリアがシャワーを浴びてる間に……紅牙は『ライドカード』を見ていた。

「（仮面ライダー……スーパー戦隊……ウルトラマン……メタルヒーロー……そして……ブランクのライドカードが数枚。）」

すると……

「何を見てるんですの？」

セシリアがバスローブ姿で髪をタオルで水気を拭いながら紅牙に近づいた。

「ん？……たんなるカード共だ。」

「ちよっと……見せてもらっても？」

「かまわん。」

紅牙はセシリアにカードを渡した。

「どうも……へえ、いろいろありますわね。あら？これは……」

セシリアは、カードを見ていく内にブランクカードの内の一枚を

見た。

「どうした？」

「あっ！いえ……………ありがとうございました。」

セシリアは、紅牙にカードを返した。

「それでは……………おやすみなさいませ。」

「ああ。おやすみ。」

紅牙とセシリアは就寝の挨拶をして……………どちらともなく眠りに落ちた。

翌日……………IS学園のセシリアがいるクラスでは、転入生がいる事を伝えてる最中だった。

「では……………転入生を紹介します。」

山田先生がそう言った後……………三名を除き騒ぎだす。

「（入学式が終わった後に転入とは……………）」

「（なんか……………胸騒ぎが……………）」

「（転入生？……………まさか！……………いえ、そうとは……………限りませんわ。あの人とは……………）」

上から……………篠ノ之箒、織斑一夏、セシリア・オルコットの三人は、心の中でそう思った。

「（ねえ……………なんか、かっこよくない？）」

「（だよねだよね。）」

「（あの鋭い目付き……………怖そうだけど……………どこことなく……………優しい感じがするし……………）」

「（織斑君と一緒にいたら……………キャッ！！）」

と、教室の中が騒がしくなってきたので……………セシリアは、前を向いた。

「っ!!」

セシリアは、驚きの表情を浮かべたと同時に……心臓の鼓動が自分でも聞きとれていた。

「（私……私……私……）」

そして、転入生の自己紹介が行われた。

「それでは……自分の名前や好きな事などを言ってください。」

「はい。俺は、龍崎紅牙……好きな事は……強い相手と闘うこと……だが『異形』に限定されるがな……あとは……知りたい情報があれば、質問をしてくれ……なるべくは答える……以上だ。」

「ちよつと……自己紹介としては……長かったかな。それじゃ席は……セシリアさんの隣でいいかな？」

山田先生が紅牙に聞くと……

「俺はいいが……あの子は？」

「私は……別に構いませんわ。」

セシリアは紅牙が隣に座るのを了承した。

「セシリアさんもいいって……言ったので……さあ、座ってください。」

「はい。」

紅牙は、山田先生に促され……セシリアの隣の席に移動した。

「よう。」

「えっ……ええ／＼御機嫌様。／＼」

「そう言えば……個人的に自己紹介は、してなかったな……龍崎紅牙だ。」

「セシリア・オルコットですわ。よろしくお願いしますわ。」

「こちらこそ……よろしくな、オルコット。」

紅牙とセシリアは各々に挨拶を交わした。

「ん？なんだ……もう、転入生の自己紹介は終わったのか？」

「織斑先生！」

と、山田先生は……織斑先生を向くが……

「げっ！千冬姉!!」

「バシンッ!!」

「いってえー……」

一夏の一言で出席名簿で織斑先生に叩かれる一夏。

「あゝ……………転入生が入ってきて早々だが……………クラス代表を決めたいが……………」

織斑先生がこう言った……………すると……………

「はーい! 織斑君が良いと思いまーす!!」

『同じく!!』

「えゝ……………織斑君よりも……………龍崎君が良いと思いまーす!!」

『同じく!!』

クラスの中で……………一夏派と紅牙派に分かれた。すると……………

「お待ちなさい!!……………何処の馬の骨ともわからない男子にクラス代表は相応しくありません!!」

「はあ?」

「だいたい……………日本という島国はあまり、ISの操縦が上手く無いと聞きます。」

「なにっ!」

「その点……………私は、イギリス政府に選ばれた……………すなわちエリートですわ! あなたたちは、試験官を倒したことはありません!?」

「へっ? あるけど。」

「俺は……………試験自体が免除されたからな……………しかし、日本を島国と言ってるが……………イギリスも島国、まあ……………飯が美味しいのは事実だな。」

「なっ!」

すると……………

「だったら……………織斑と龍崎とオルコットの三人でクラス代表を決める試合を一週間後に行う……………それまでに……………織斑と龍崎の二人はISの知識を理解するなり……………訓練をするんだな。以上!」

と……………言って、教室を出ようとする織斑先生だが……………出る前に……………

「あゝそうそう……龍崎！お前は、オルコットと同室だからな。」

『えっ！？』

「おっ！織斑先生！！」

「……………はっ？」

「じゃあな。」

織斑先生の一言で一同静まり返るクラス……………

／／／／／／／／／／／／／／／／

「……………」

茹蛸の様に真っ赤になるセシリアと無言の紅牙。

「どうしますの？／／／」

「俺はかまわん……………オルコットが嫌なら俺は部屋を出る。」

「そんなんっ！私は構いませんわ……………ですから……………一人には……………しないでください／／／／／」

「ああ。大丈夫だ……………どんな事を言っても……………お前を一人にはしない。」

クラスのほとんどが見ているなか……………告白紛いな事をやってのけた、セシリアと紅牙。

第2話 転入（後書き）

紅牙「なんなんだ……あれは？」

作者「ん？セシリアとラブ×2にさせるための布石。」

紅牙「余計なお世話だ。」

ジェス（なのは&mp;スーパーヒーロー）「諦めとけ……『セキ』。」

紅牙「もとはと言えば……お前の責任だろ！『セイ』！」

セシリア「長くなりそうですので……私が……次回、インフィニット・ストラトスINREDDECADE……第3話、特訓と異形……次回も見てくださいませ。」

第3話 特訓と異形（前書き）

異形があまり……目立たない。

第3話 特訓と異形

— I S 学園・訓練場 —

「……………」

紅牙は、自分専用機を持っていたが……使用した事はまったくなかったので……転入早々、訓練場で練習をしていた。

「初めてにしては……中々ですわ。」

「そうだな。」

「あいつ……俺より上手いんじゃない？」

観客席にあたるところには……セシリア、織斑先生、一夏がいた。

「ですが……飛行できないのは……難点ですわね。」

「ああ、確かに……それに武装も少ないな。」

「本人に聞いてみた方が早いだろ。」

「そうだな。行くぞ。」

織斑先生が紅牙のところに行くのをセシリアと一夏は後からついて行く。

「ふう……このくらいにするか。」

紅牙は自分の I S……『レッドディケイド・アナザー』を待機状態にした。

「なんだ？もう終わりか？」

織斑先生が一夏とセシリアをともなってやって来た。

「エネルギー回復のためですよ。」

「そうか……それよりも、飛行はできないのか？」

「できないことは……ないんですが……何分、『第一段階』（ファーストフェーズ）になってないんで。」

「なるほど……武装は？」

「初期装備の『ライドブッカー・アナザー』があれば……射撃と格闘は難無くこなせるんで。」

「そうか。」

「でもよ……初期であそこまでは……」

「動き方も……何か、『本来の装備』とは、勝手が違ってたイメージでしたが。」

「（鋭いな。）さあな……オルコット、お前の……っ!!」

「どうしま……全員、伏せろ!!」……えっ？」

『っ!!』

一夏と織斑先生は紅牙の言葉と斜め方向の殺気を感じ、その場を離れたが……セシリアだけは……

「なっ!何ですか?」

状況がまったくわからないのか……動こうとしなかった。

「ちい!!」

「龍崎!」

「おいっ!!」

紅牙はセシリアの近くに走った。

「龍ざ……はっ!？」

セシリアは、何かに気付き……後ろを向いた……そこには、『I Sの様な』何かが剣をセシリアに振り下ろそうとしていた。

「なっ!?(これは?怖い……誰か……助け……)」

『……』

謎のISもどきが剣を振り下ろす。

「逃げろ!オルコット!!」

織斑先生がセシリアに叫ぶが……セシリアは何かに怯えたかの様に動かない……セシリアが怯えているもの……それは、死の恐怖。

「あ、ああ……」

恐怖心がセシリアを支配し動けなくしていた。

「（助けて……助けて……龍崎さん!!）
ーガキンッ!!」

「う………はっ!!」

「ぐっ!？」

紅牙が寸前で間に合い……レッドディケイド・アナザーを装着して、ライドブッカー・アナザー・ソードモードで受け止めていた。

「大丈夫か？」

「あっ! はい、大丈夫ですわ。」

紅牙は、剣を受け止めながら……セシリアの安否を確かめ、セシリアは無事だと言う事を紅牙に伝えた。

「そうかい………ダァッ!!」

『!!??』

紅牙は、剣を押し返した。

「いったん、下がるぞ。」

「………はい。」

紅牙は、セシリアと一緒に一夏のところまで下がった。

「オルコット!」

「大丈夫か？」

「ええ。」

織斑先生と一夏はセシリと紅牙に駆け寄った。

『………』

謎のISもどきは、ターゲットを紅牙に絞った。

「（俺を狙うか……）」

紅牙が戦闘に入ろうとした時だった………何処から通信が入った。

『よう! 『セキ』!!』

「『セイ』!! 何の用だ。」

『そっちにさ……機械的な奴……出てない?』

「現在、対峙中だ。」

『マジか……多分、某国が作り上げた『無人IS』だろう。』
「何処の国だ？」

『さあ……画像を見せてくれ。』

「ああ。」

紅牙は『セイ』にISもどきの画像を見せた。

『悪い、訂正……あれ、『こっちの世界』のマッドのガジェットドローンType?改だ。』

「はあ!？」

『つう訳で……ガンバレ。』

「おいっ! 『セイ!』 『セイ!』 …… 『レナنجエス・アル

マー! !』」

『本名を叫ぶな! !』

「あっ! ワリイ、ワリイ。」

おもわず、『セイ』の本名を叫んだ紅牙。

「まあ、ガジェットなら……加減はいらないな。」

『ああ。』

紅牙と『セイ』の通信はそこで終わった。

『……………! !』

「ぐっ! !」

「なっ! !」

「龍崎! !」

「あああ……………くっ! !」

セシリアは紅牙の下へと走ろうとしたが……………

「やめろ! オルコット! !」

「織斑先生……………ですが! !」

すると……………

「ふう……………いい、一撃だな。『第一段階』（ファーストフェーズ）への移行が遅かったら…………アウトだったぜ。」

紅牙のIS…………レッドディケイド・アナザーの『第一段階』（ファーストフェーズ）の移行がギリギリ間に合い、ダメージはそんな

になかった。

「ファーストフェーズ!？」

「あのタイミングでか……」

「よかった……無事で。」

一夏と織斑先生は驚き……セシリアはホッとしていた。

『……………!!』

「ハッ!!」

—ギンッ!—

紅牙は、ガジェットの剣をライドブッカー・アナザー・ソードモ
ードで受け止めた。

「タァッ!!」

『!?!?』

紅牙がガジェットの剣を弾いた……次の瞬間……

「ふっ……。」

—ヒュンッ……………ズバババッ!!—

『!?!?』

「デッド……………エンド。」

—バンッ!—

ガジェットは紅牙の高速連続斬りを受けて……爆散した。

「ふう……。」

紅牙はレッドディケイド・アナザーの装着を解除した。

『龍崎!!』

「龍崎さん!!」

セシリア達が紅牙に駆け寄った。

「大丈夫だったか？」

「ああ。」

「まあな……オルコットを制止させるのに手一杯だったがな。」

「だって……龍崎さんが……心配で……」

「そっか……ありがとな。」

すると……………

『イーーーーー!!』

全身、黒タイツに人骨が描かれている物を着た謎の集団が一夏達を囲んだ。

「囲まれた。」

「なんだよ……。」

「なんなんですか?」

三人は口癖にこう言ったが……紅牙は……

「まったく……『毎度、お馴染みの雑魚』か。」

「龍崎さん?」

「オルコット……お前の勘は正しいぜ。見せてやるよ……俺の……『もう一つの姿』!!」

紅牙は、セシリアにそう言う……待機状態のレッドディケイド・アナザーを右手で取り……左手に持ち替えた……すると、ブレスレットからバツクルに変わって、紅牙は腰に装着した。そして……左側にある……『ライドブッカー』から一枚のカードを手にとった。

「変身!!」

—KAMENRIDER REDDECADE—

紅牙がカードをバツクルに入れた後に……バツクルのサイドレバーを押し込んだ、と同時に……紅牙を中心に12の虚像が現れ、紅牙に重なる……大小の赤い四角の物体が顔と一体化し……赤いラインと銀色のラインが光り輝き、ディメンションアイが蒼く輝いた。

「龍崎さん?」

「今の俺は……仮面ライダーレッドディケイド。」

『仮面ライダー……』

「レッドディケイド……」

一夏達は、レッドディケイドの名をつぶやいた。

「さあて……邪魔だ。」

—ATTACKRIDER……BURAST—

「ハッ!!」

レッドディケイドは、ライドブッカードをガンモードにして、雑魚戦闘員を撃った。

「面倒だなあ……………」

—ATTACKRIDE……ILLUSION—
—FINALATTACKRIDE……DE・DE・DE・DEC
ADE—

『ハア—————ッ!!』

レッドディケイドは…………イリュージョンの効果で分身し、さらにファイナルアタックのカードで…………雑魚戦闘員に銃撃や斬撃、キックをお見舞いして倒した。

「こんなもんか。」

「すげえな!」

「なるほどな……………」

一夏と織斑先生が近くに寄った。

「これで全…………「キャア!」…………っ!!」

悲鳴のした方向に顔を向けると…………灰色の蠅螂の怪物…………『マ
ンティスオルフェノク』が立っていた。

「動くな!! 動けば…………この娘の命は無い。」

「ひっ……………」

マンティスオルフェノクは、自身の鎌をセシリアの首に当てていた。

「……………」

「卑怯な!」

「オルコット! しばらく我慢しろ!!」

紅牙は無言…………一夏と織斑先生はそれぞれに口走った。

「さあ…………変身を解除しろ!」

「（龍崎さん…………）」
すると……………」

「…………さねえ……………」

「あん?」

「てめえは……絶対に許さねえ!!」

紅牙は……マンティスオルフェノクに対し怒りをあらわにしていた。

「あん? てめえに…何g『ドンッ!!』…があっ!?!」

マンティスオルフェノクが何かを言ってる間に……素早く動き、マンティスオルフェノクをセシリアから引き離した。

「……………消えろ!!」

—FINAL ATTACK RIDE……FA・FA・FA・FAI
Z—

「クリムゾンスマッシュ!!」

レッドディケイドは姿を変えるカードを使用せず……ファイズのFINAL ATTACK RIDEを発動させ……マンティスオルフェノクを倒した。

「はあ………はあ………オルコット。」

「龍崎さん。」

「無事でよかった。」

「ありがとうございます……龍崎さん……いいえ……龍崎様。」

紅牙は、マンティスオルフェノクを倒したと同時に変身を解き……セシリアの無事を確認した。

「龍崎様………これから私や……学園を護る……ナイトでいてください。」

「ああ。約束する。」

セシリアは、顔を紅牙の胸にやりながら……紅牙にお願いをして、紅牙はそれを了承した。

第3話 特訓と異形（後書き）

セシリア「紅牙様／＼／＼」
ジェス&mp;紅牙『トリップするな！！』

作者「次回、異世界人と模擬戦。」

番外編 異世界人と模擬戦（前書き）

えく………かなり、原作から離れています………キーワードに『原作ブレイク』あるから………原作に沿わないのはいやって、人は………回れ右をオススメしたい。

番外編 異世界人と模擬戦

— I S 学園・正門前 —

一人の青年が I S 学園の正門前で入場許可をもらっていた。

「理事長から許可が下りました。では、調査：頑張ってください。」

「??? はい。（『セキ』……ちよいと、様子見させてもらうぜ。）」

入場許可されたのを確認し、学園に入る青年。

— I S 学園・紅牙達の教室 —

教室には……既に生徒が揃っていた。

「お？今日は、静かだな。」

織斑先生が山田先生と一人の青年を連れて、入ってきたのを……

一夏と箒、セシリアは確認した。

「まずは……本日は、グランドを使用しての実技だったが……
先日、謎のロボットが学園内に侵入、それを撃退した破片や残骸がある……急遽、ロボットの残骸、及び破片の回収、その調査になった。」

すると……

「千冬姉！ーバシンッ！ー……いたっ！ー！」

一夏の『千冬姉』という言葉に反応した、織斑先生が一夏の頭に出席簿での一発を見舞った。

「学校では『織斑先生』と、呼べと言ったはずだが？ 織斑。」
すると…………一夏の代わりに筭が…………

「織斑先生！ その人は、調査に関係あるんですか？」
と、クラス全員のごもつともな質問をした。

「ああ。紹介しよう…………この度、調査を協力してくれる…………」
??? 「レナンジェス・アルマーだ。ジェスと呼んでくれ、よろしくな。」

すると…………

「何が…………『よろしくな』…………だよっ！！」

クラスの最後列、セシリアの隣の席の紅牙が勢いよく空中キックを食らわした。

「フンッ！！」

ーバシッ！！ー

しかし…………ジェスは片腕だけで紅牙の蹴りを受け止めた。

『……』

……』

教室が静寂に包まれる。

「スピードはやはり、速いが…………加速力、力の一点集中の二つは…………まだ甘いな。」

「へっ…………ぬかせ…………それにしても…………反応が高すぎる？」

「こうでもしなければ…………『あいつらの訓練』に耐えられん。」

ただでさえハードなんだからよ。」

と、二人は会話をしながらポーリングを崩し…………自然体になった。

「まっ！ 何はともあれ…………久しぶりだな、『相棒』！！」

「ふっ…………そっちは、俺以外の『相棒』も多いんだろ？」

「まあな。」

紅牙とジェスは、昔からの親友の様に自然に会話していた。

「龍崎様？ このお方とお知り合いですの？」

セシリアは紅牙の近くに行き、紅牙に問い掛けた。

「ああ。こいつと俺は……本来の力の姿が酷似してるし……」

「色も……俺が『青』、紅牙が『赤』だから……『青龍』と『赤龍』から『セイ』と『セキ』って、呼び合ってたんだ。」

「他にも……『コク』や『ジオ』なんて奴もいるな。」

「なんだか……複雑ですわね。」

すると……

「お前達……」

「「（ビクッ!）」」

セシリアと紅牙の後ろに織斑先生が爽やか且つ、黒いオーラを纏って二人を見ていた。そして……

「ピタッ……バシンッ!」

二人にそれぞれ、威力の違う出席簿攻撃をした。

「（あまり、痛くないですわね。）」

「っ~~~~~」

まったく、威力の無いセシリアに対し……一夏の倍はあるだろうダメージを負った紅牙。

「さっさと、席に戻れ!!」

「「……はい。」」

セシリアと紅牙は、おとなしく自分の席に戻った。

「では早速、調査を……」その前に!」……はい?」

山田先生の言葉をジェスが止めた。

「紅牙! 久々に一戦……どうだ?」

ジェスは『ブルーディケイドライバー』を紅牙や生徒に見せながら言った。当然、一夏と箒、セシリア、紅牙を除いた生徒がざわめいた。

「一戦って……」

「ひょっとして、決闘?」

「龍崎君! 決闘なんて……しないでね? 絶対に!」

「そうだよ。」

と、口癖に紅牙を止めようとするクラスメート達……………しかし……
「そうだな……………久々に感覚を取り戻しておくのも……………悪くはない……………良いぜ！ジェス！！」

「ふっ、決まりだな。」 クラスメートの反対を余所に、紅牙とジェスは……………決闘をすることになった。

— I S 学園・第3アリーナ —

ジェスと紅牙の二人は、織斑先生の許可を得て……………第3アリーナのピットにいた。もちろん、観客席には紅牙のクラスメート、ジェス側のピットには……………合流し、手伝いに来たらしい……………『月影ゆり』と『春日野うらら』がいて、紅牙のピットには……………セシリアがいた。織斑先生と一夏、箒、山田先生は……………実況席みたいなところにいた。

ジェス側ピット

「ジェス……………確か、調査のために来たのよね？」

「ああ。」

「じゃあ……………何で、戦おうとしてるの！！」

ジェスの行動にゆりは若干、キレていた。

「ゆりさん！クールに……………クールに……………」

「あっ！いけない……………わたしたら。」

うららがゆりを宥めて……………ゆりは平常心を取り戻した。

「まあ……………俺が、ミッドに行くまでは……………あいつが模擬戦相手

だったからな。どれくらいになったか……確かめたくてな。」

「それなら、良いわ。」

「私も賛成です！先輩……！」

ジェスが理由を言う……あっさりと、承認するゆりとうらら。

「それじゃ……そろそろだな。行ってくる。」

「「いつてらっしゃい……！」」

ジェス側ピットアウト

紅牙側ピット

紅牙は、準備運動をしながら……ISの調整をしていた。

「まあ……ISモードは使うことは、無いだろうけれど……。」

「調整はしておいて……損は無いですよ。龍崎様。」

セシリアは、紅牙の準備運動とISの調整に付き合っていた。

「そうだな……よしっ！調整終了。じゃあ、行ってくる。」

「気をつけてください。」

「ああ。」

紅牙は、ISの調整を終えた後……セシリアとちょっと会話をしてから……フィールドに歩み寄った。

紅牙対ジェス

紅牙とジェスは一定の距離を取り……その場に立った。

「行くぜ？」

「ああ。」

そして……まったく同じ動作でドライバーを腰に装着した。

『変身!!』

—KAMENRIDE……REDDECADE—

—KAMENRIDE……BLUEDECADE—

これまた、同じ動作で変身をして、色以外はほとんど同じ……仮面ライダーディケイドに変身した。ただし、紅牙がレッドディケイド、ジェスがブルーディケイドだが。

「赤いのが……龍崎だな。」

「織斑先生。」

「なんだ、篠ノ之。」

「あれは……ISですか？フルスキンのISは聞いた事があります。」

「直にわかる。」

実況席みたいなのところの会話を余所に……観客席では……

……

『……なに、あれ？』

一同、疑問がびっしりだ。

「行くぜ？」

「ふっ……来いっ!!」

二人のディケイドは、同時に駆け出した。

『タアーーッ!!』

二人の拳が見事に寸分のくるいなくぶつかった……それを合図に、ディケイド系のライダーではまず、ありえない……ノーカードライドによる、『超高速戦闘』が開始された。

『ハアーーッ!!』

二人のディケイドは……拳、ライドブッカー・ソードモードを何回か……当てていた。

『いったいなにっ!？』

クラスメートはもちろん……ゆり、うらら、山田先生、織斑先生、セシリア、一夏、箒も確認出来るのは……赤と蒼の残像だけだった。

—スタツ!!—

突然、超高速戦闘が終了し、通常スピードの二人がアリーナ中心部にいた。

「さてと……そろそろ……」

「むっ!!」

「変身!」

—KAMENRIDE……KIVA—

レッドディケイドは蝙蝠のライダー……仮面ライダーキバに変わった。

「ふっ……面白い、変身!!」

—KAMENRIDE……W—

—CYCLONE・JOKER—

ブルーディケイドは、二人で一人のライダー……仮面ライダーWに変身した。

『姿がまた変わった!?!』

『行くぜっ!!』

—FINALATTACKRIDE……—

—KI・KI・KI・KIVA—

—DA・DA・DA・W—

RDキバは右側に移動したバックルにキバのFINALATTACKRIDEのカードを読み取らせ……左側にある赤い笛を取り出した。

『ウェイクアップ!!』

RDキバは赤い笛をバックル部分に交代で出現した『キバット』に噛ませた。

「ハア……ハッ!!」

RDキバが右足を振り上げると同時に……アリーナ内が月夜に

なり……RDキバの姿を月光が照らしていた。

—J O K E R M A X I M U M D R I V E—

BDWは、ブルーディケイドライバーが右側に移動したところにWのFINAL ATTACK RIDEのカードを読み取らせ……代わりに出来た『ダブルドライバー』から『黒いUSBメモリ』を右側のメモリスロットに挿した。

「ハアーーーーー……」

BDWの声と同時に……強烈な疾風がBDWを空中に上げていた。なお、余波で起こる強風で制服のスカートや私服のスカートがめくれそうになるのを……女子達はスカートを押さえて戦闘を見ていた。唯一……実況席みたいところにいた、箒と山田先生、織斑先生は免れたが……。

「ハッ！」

RDキバは片足でWと同じ高さまでジャンプした。

「ダークネスムーンブレイク!!」

「『ジョーカーエクストリーム!!』」

RDキバとBDWは同時に必殺技を放った。……この時、BDWから『二人分の声』が聞こえたとか聞こえなかったとか。

—ドオオン!—

爆音がアリーナ内に響いていた。

—ズザアーーーーー……—

RDキバとBDWは元のレッドディケイドはブルーディケイドに戻り……ちょうど、自分達のピットの反対側に着地した。

「ちっ！」

「また、引き分けだな。」

「らしいな。……織斑先生!もういいですよ!!」

紅牙は変身を解き……織斑先生に終了を報告した。

その後は、紅牙とジェスが紅牙のクラスメート達の質問攻めにあい、その間にうららとゆりが途中合流のフェイトとティアナと協力し、破片と残骸を回収……学園の外で待機していた。

一夏や紅牙達はジェスを見送るため……学園の正門近くにいた。

「じゃあ、俺達……帰るわ。」

「ああ。」

紅牙とジェスは互いの右拳をぶつけた。

「セシリアさん……紅牙くんの事は……よろしくね。」

「セシリアさんと紅牙さんなら……絶対に大丈夫ですよ。」

「ありがとうございますわ。ゆりさん、うららさん。」

セシリアとゆりとうららは……ほんの短時間で名前呼び合うくらいに仲良くなった。

「兄さ……ん!! そろそろ、行くよ……!!」

「ああ! それじゃ!!」

「また、会いましょう。」

「バイバー……イツ!!」

ティアナに急かされ……ジェス達は転送陣に乗った。

「あつと……紅牙! 届け物だ!!」

ジェスは、紅牙に一つの箱を投げ渡した……と、同時に転送が開始され……紅牙がキャッチしたら……転送が完了し……ジェス達は、元の世界に戻っていた。

番外編 異世界人と模擬戦（後書き）

ジェス（なのは&a m p;スーパーヒーロー）「俺……………後、何回……作者の『なのは&a m p;スーパーヒーロー』以外の作品に出るんだ？」

作者「さあな……………未定だ。」

ジェス（なのは&a m p;スーパーヒーロー）「ちっ……………」

作者「つう、訳で……………次回、クラス代表戦前夜……………祭りじゃないからな。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1351ba/>

インフィニット・ストラトスinTheREDDECADE

2012年1月13日10時46分発行